

## 山岳小説

今回は山岳小説、山を舞台にした小説を紹介します。

1冊目は、新田次郎の『孤高の人』です。昭和初期に活躍した実在の登山家・加藤文太郎が主人公です。当時、登山はパーティを組んでの団体行動と、高額な装備、ガイドを雇うための多額な費用を必要としました。しかし、加藤は、ありあわせの装備と単独行により、日本アルプスの数々に積雪期登頂を果たし、槍ヶ岳冬季単独登頂や、富山県から長野県への北アルプス単独縦走によって「単独登攀の加藤」として有名になりました。

著者は、昭和31年（1956年）に50貫（約180キログラム）もの巨石を背負って白馬岳山頂に挑む山男を描いた『強力伝』で作家デビューし、直木賞を受賞しました。昭和39年（1964年）に気象庁の建設責任者として富士山頂に設置した富士山レーダーの建設に携わり、『富士山頂』という作品が生まれて、石原裕次郎主演で映画化されています。他にも、『八甲田山死の彷徨』など多くの山岳小説を書いています。

2冊目は、谷甲州の『遠き雪嶺』です。昭和11年（1936年）、立教大学山岳部は日本人初のヒマラヤ遠征として、ナンダ・コート峰に挑戦します。寄付金集めや遠征隊員選抜が難航したことに加え、二・二六事件が勃発するなど、多くの困難を伴いながらのスタートでした。この作品も実話が元になっています。

著者は、平成8年（1996年）『白き嶺の男』で第15回新田次郎文学賞を受賞しています。

3冊目は、夢枕獏の『神々の山嶺』です。ジョージ・マロリーは、イギリスの登山家で、「なぜ、あなたはエベレストに登りたかったのか？」と問われて「そこにエベレストがあるから」と答えた逸話は有名です。マロリーは大正13年（1924年）のエベレスト遠征において頂上付近で行方不明となり、平成11年（1999年）に遺体が発見されましたが、世界初の登頂を果たしたか否かは、未だに論議を呼んでいます。この謎を解く可能性があるマロリーのカメラが見つかったという設定で物語が進みます。

平成10年（1998年）に第11回柴田錬三郎賞を受賞。今年3月に平山秀幸監督、岡田准一主演で映画化されて、『エヴェレスト 神々の山嶺』のタイトルで公開されました。

4冊目は、笹本稜平の『南極風』です。ニュージーランドにある、南半球のマッターホルンの異名を持つアスパイアリングという山で、遭難事故が起きます。登山ガイドの森尾は、悪天候の中でツアー客を救出しますが、保険金殺人の容疑で逮捕されます。無実を勝ち取るための闘いが始まります。

5冊目は、樋口明雄の『ブロッケンが悪魔』です。南アルプス北岳山荘を武装集団が制圧しました。超大型台風が到来、警察も自衛隊も接近できない陸の孤島と化した山で、テロリストたちとの闘いが始まります。「南アルプス山岳救助隊K-9」のシリーズ作品です。